ある村の出稼ぎ年表

——秋田県十文字町M地区の場合——

特集 3

佐藤　正

目次

1——はじめに
2——流亡の告発と立証を
3——農民自立の道をさぐる
4——村の出稼ぎ年表

1——はじめに

秋田県十文字町M地区<かってM村であった>は横手盆地の中央を流れる雄物川に添って拓かれた純単作地帯である。水田面積約700ha，文字どおりの米どころである。東に列島の背骨奥羽山系，西にゆるやかな山羽丘陵の山なみが続き，豪雪の中で突然狂ったように噴煙を上げた鳥海山が，流れ出た地下異物のしたたりに黒ずんだ山肌をみせてそそり立っている。

小西某，行年27才，昭和49年4月死亡，真新しい墓標の痛々しく立つ共同墓地のそばの砂利道を，今朝もまた，土方仕事や町工場へ連れ去られる村の父と母たちを乗せたマイクロバスが，次々と車輪をきしませて通りすぎてゆく。

水田単作地帯は，また，そのまま，出稼ぎ地帯でもある。侵略と繁栄の橋ゲタとなった人間の供給地であった。取り入れが済むと，樋いを伝わる雨水のように駅に集まって夜行列車の人となるのである。春4月、待っている種子蒔きを終えると，地元の土方仕事に従事するのだ。反収12俵の高技術はほとんど早朝と夕方に発揮されるだけである。自給している，いや余っていると言われる国民食糧の米は，農民にとっては，片手間ほどの報いしか与えられていないのである。

高騰を続ける農機具，肥料，農薬，「都会並み」の幻想を阿片のようにふりまく宣伝と押しつけ商法，減反，耕地基盤整備，大型機械が農民の体と心を粉々にする拷問の道具のように目白押しにつまってきているのである。人の好い拒絶なき消費は厖大な家計となって現われ，働いても働いても家計の帳尻が軽くならないのである。仕組まれた商品現金経済の渦に有史以来はじめてまき込まれた農民の姿，ものを創り，土をつくることから無理矢理手足をはぎとられた農民の姿は，体を切り売りする安い労働力となって，同じ出生の労働者をお

びやかしはじめているのである。

ここに出稼ぎ問題を，農民流亡政策の一環として捉まえる時，〝村〟そのものがたどった歴史の暗部に下降し，流民と棄民の系譜の荒縄をたぐり寄せ，たとえそれが秘められた〝村〟の屈辱の人間史であったとしても，現代との照合の中で，もたらした支配構図の作謀を堀り尽くさなければならない。なぜならば，それがそのまま，土にしがみついて生きつづけてきた祖先の，私たちにとってはかけがえのない唯一の祖先のたたかいの歴史であるからである。列島改造の無謀きわまる巨大な歯車に「破壊される」自然の価値を守り育てて来た祖先でもあるのだ。このことは，すべての被支配者にとって祖先であると言わなければならない。

2――――流亡の告発と立証を

私の村は250年間生き続けてきました。思えば一つの驚きでもあります。藩とその下に重層する支配階級の都合によって切り拓かれた荒涼たる泥炭地帯が，県内でも指折りの米どころと変っているからである。

村が生きつづけるために，土着の祖先の幾十倍もの流亡の祖先がいたことを明らかにしなければならない。子捨て，身売り，軍隊，集団就職，出稼ぎ，形こそちがいがあれ，村を維持するために，家と小所有を維持するために、帰ることの出来ない村をふりかえり，ふりかえり発って行った流亡の祖先の，かみしめた青白い唇と，またたきのない眼をそのままにしておくことは許されない。この唇と眼が，村の姿がテカテカと原色に彩られれば彩れるほど，火伏せの札のように，村に張りついて離れないのである。

村の年表は，流亡して村を守った運命の人々とその背景のほんの一部を書いたものにすぎない。これを通して，おびただしい無名の人々の惨とした人間史をかい間みることが出来る。この村の生きざまは，繁栄といわれるクニ<国>の姿の切り口ではないのか。草で覆われた共同墓地には，墓標も石もない数しれぬ人々の然念のドス黒い血が、その地底によどんでいるのである。

その告発と立証のゆく手にあるもの，それはきびしい自然や，政治の抑圧とたたかい，伝統を育て，土と生活に根ざした民族のとりでを築き上げた農民魂の復権と，科学的検証にみがかれて構築されてゆく農民のエネルギーと組織の創造でなければならない。

生き抜いてきた歴史の一コマ一コマを現代的な課題に組み替え，具体的な人間創造運動に発展させなければならない。ムラに住む者にもマチに住む者にもこのことは共通なのである。

3――――農民自立の道をさぐる

農民の自立とは人間の自立である。私どもはそのためにまず，土地を自分のものにするためにたたかった祖先の本当の姿を知らなければならない。

口無堰というのがあった。〝くち〟つまり水源のない堰のことを言うが，この堰はやたらと曲りくねったものになっている。高張田に水を引く堰もそうだ。なんで必要があるのかと思うほどくねくねと曲り，原始的な田づらをつくっている。今から約二百数十年前，佐竹藩の新田開発政策によって不毛の泥炭地に放り込まれた私どもの祖先はつくるに保障なき重い年貢の中で，土地にしがみつきその日の食にありつくには，今日的想像を超える苦難の中で，生きつづけるためのたくましい創造の力を発揮したからなのだ。

口無堰は下田，かくし田開懇の水路であった。曲

りくねって大きく長いのは，周囲からのしぼり水をためるように工夫されたものであったし，年貢の比較的安かった高張田への堰は，地形の微妙な高低をさぐりあて，勾配ゆるやかに水を引くため距離を長くし低いところでは幅を大きく，高いところでは狭く，水圧によって通水させるように工夫されたものであった。この必然の曲線こそ上田の「さお伸び」をつくり，家と共同体を守る大きな武器でもあったのだ。また，身近かにある三尺，四尺，五尺の木片を組み合わせ，簡単に直角三角形をつくった。これを，田植えの縄張りや，中畦，横畦を立てるのに使ったのである。曲りくねった田づらをつくっておきながら，一方ではこうして直角を利用して自分の土地を守り育ててきたのである。

また，土を守ることは，土壌をつくることでもあった。それが例え，地主や親方のものであろうと現実に自分が耕作している以上，それは自分のものであった。煮炊したあとの木灰，藁灰は，きちんと区別され，米俵におとらぬ美装の俵に入れて貯わえておく。藁は，藁細工や，牛馬の飼料，それに牛馬の寝床として踏ませ，刈った草とともに堆肥としてうず高く積まれた。一丈<10尺>になると餅をついて苦労をいやし，来年の豊作を祝ったものである。堰の中の泥はとくに大切なものであった。黒ぼく泥炭地の表土をつくり変えるにはどうしても客土を必要としたからだ。

「雪しろ水」を利用した春の「ゴミ追い」。秋の枯水期に行う「ゴミ揚げ」，吹雪をついての「ゴミ追い」と，四季風雪の区別なく続けられてきたのである。人糞がめは3年周期にふたをとられ，無臭黄金の液肥として最も貴重なものであったし，馬糞でさえ競って拾い集め，小便をするにも田畑の作物の根元に放るよう子ども達をきびしく教育したのである。このことは，自然の中に作物や家畜を育てる農業にとって最も基本的なものであり，それだけにまた科学的法則性をもったものとして引きつがれてきたのであった。

なお，いかなる収奪と隷従の中でも，私たちの祖先はこのことを怠らなかった。怠たっては生きてゆけないぎりぎりの状況に立たせられてきたが故に，農耕は厚く創造と反権力をその土壌の中に鋤きこんできたのである。

最近，農地を真四角にする工事が進んでいる。基盤整備事業と言っている。土質と地層を無視し，農機具の売り込みと，税評価という支配の都合でやられているこの工事は，出稼ぎのためにいない男衆，総代や理事や村議さえも出稼ぎに出ている中で，なんの障害にも合わずに進められているのだ。

農民が自立するということは，土を「とりで」とし，村を「根拠地」とする思想の中で農の原則の回帰と，エネルギーの復活を具体的にすすめることである。そのためにはまず基盤である農地を，自分たちの土地につくり変えてゆくことである。1枚30a<3反歩>のアテガイブチを嘆くのではなく，土質によって畦を立て，栽培品種を精選してゆく。堆肥や客土をどっさり入れる。暗渠排水を縦横に堀り，悠々とした畜耕のことだって考えてみたいものだ。

しかし，このようなことは「出稼ぎ」という金とり根性からは生まれてこない。娘を身売りしても土地を守り，あの侵略戦争のさなかにも，口無堰や高張田にヤモリのように這いつくばり，「濁酒さがし」や「強制供出」「強権発動」にも屈せず，米や野菜をつくってきた歴史を，もっともっと広く深く発見し合わなければならない。そこに私たちは土地を自分のものにするために闘った祖先の真の姿を発掘し，そのことが，資本と政治の収奪のワナである。「都会並みの生活」の幻想を拒否するとともに，出稼ぎを悪としてとらまえてゆく思想の確立を図らなければならない。

今日の状況の中で，出稼ぎをしないということは自らの生活を資本の論理で追求することを止め，政治的・社会的状況を主体的に革新してゆく決意と行動に，強烈に裏打ちされた生活の民族的再構築を意味する。方法的には，「出稼ぎぐらい金のとれるところがあったら俺ア出稼ぎなんかにいかない』という現地離農の考えを，『金でない金の価値をつくるために出稼ぎなんか行かない」という組み替えを必要とする。そのためには，どうしても生産，生活における新しい自給体制を確立してゆくことではないか。つまり，造って生きる底力の回復である。農の所産と自然の循環にマッチした造る生活の確立，生産もあてがわれた機具の操縦にによって決っする資本のルールを打ちこわし自らの手で道具をつくってゆく技能を回復することなのである。近代科学が真に農業と農民のものであるためには，その継手の空間に，太い農民＜人間＞の科学ががつしりと連結している必要があるのだ。私たちが祖先のたくましい創造のエネルギーを正しく受けついだ時，圧縮された自噴の血脈が音たてて現代の毛細管の先端まで浸しはじめるであろう。

このような創造運動をつくり上げてゆくのに必ず必要なものは，新しい家族連合をつくってゆくことである。家族の一人一人がすべて確実に生産に直結した生活の任務を持つことである。そのためにはまず，老人に用のない家族連合であってはならない。それは，長く苦しい闘いの歴史の中に貴重ににじみ出たものを，正しく位置づけ評価するのは，私たちの重要な任務だからである。老人も，婦人も，子どもたちも，それぞれの立場で生産活動に主体的に，しかも集団的に参加することによって，新しい共同体連合を生み育てることが可能になってゆくのである。

こうした中でとくに大切な仕事は，子どもの出稼ぎ認識をどうつかみ，どう変えてゆくか，ということである。

「父ちゃんが行っても寂しくない！早くお金がこないかなァと，毎日，母ちゃんと待っている」。父を慕う子供達の声，豪雪に埋もれた我が家を守るため，吹雪に吹きとばれそうな小さな体をふんばり，父の名を叫び続けながら泣いて雪おろしをした子ども達の沢山いる中で，お金だけを待っている子どもの声を発しさせたものはなんだろう。それは言うまでもなく，出稼ぎ問題を理論でなく，あまりにも感覚の中にとじこめてきた私達おとな＜教師＞の責任なのである。日本農業を本当にしっかり子ども達に教えたであろうか。出稼ぎを生みだす日本農業の〝悪〟の根源に気づかせる学習の中で，子ども達の認識をあらためてゆく運動を組織したであろうか。新しい共同体連合をつくるために，こうした反省を道標として農村に住むあらゆる人々に訴えつづけ，語り合い，行動し合う運動が村の片隅に生まれてきている。「金でない金の価値」を見い出す大きな課題は私たちにとって耐えられない重荷のように見えたりする。しかし，「金になるならなんでもよい」という思想は流民を意味し，階級の破滅にも通ずることだ。それ故にこの課題は大きいのだ。善意と対症の術策があったとしても所詮大きな切り傷を残すのみであろう。だが，どうしてもこのことをやらなければならないことなのだ。新自給体制，新家族連合，新共同体連合の確立こそこの課題にこたえ得るものであることを強く提唱したい。そのためには，地道に結ばれる仲間をふやしてゆく働きを続けてゆくことだ。そして，この自覚的集団を核として，自給体政治の真の革新のために地域での根拠地づくりを随所にすすめてゆく必要があるのだ。

4 ――――村の出稼ぎ年表

――秋田県十文字町M地区の場合――

明治39年　M村，小作人S，兵庫県明石の紡績工場の募集人となり，長女Cさんを働きに出す

▼Sは，日清・日露の両戦争に出征し，金鵄勲章をもらった人である。「働きに出す」とは，ほとんど前借年季奉公のことである

<明治39年の米一俵5円28銭>

▼Sは，明治41年に二女Sさんを，明治44年に三女Mさんを大正3年に四女Tさんを<いづれも当時12～13才ぐらい>明石の紡績工場に働きに出す

大正3年　小作米反当り一石一斗，イモチ病のため大凶作で収量は反当り一石一斗程度であった<米一俵4円程度の値段>

▼日雇の妹Aさん<当時12才>が，東京亀戸のキャラコ工場に働きに出される

大正9年　流行性感冒が大発生し，M村だけで40人以上の人が死亡する

大正10年　前記Tが妹を頼って出稼ぎにゆき，妹の世話で千葉県の農家に入り，サツマ芋掘り，片栗粉工場と，8月から翌年の5月まで出稼ぎする。秋田のタッチャンと呼ばれ食べただけの賃金でよく働く<大正10年の米一俵14円20銭>

大正12年　佐々木徳蔵氏が募集人になり，佐藤カツエさん，土谷ツマさん，佐々木トメさんらを，東京亀戸のキャラコ工場に斡旋する<キャラコ工場にゆくことは村の娘たちの憧れの的であった>

▼雪どけ頃に働きに出たが，関東大震災のためほとんど村に帰る

▼前記小作人Sの四女Tさんは大正13年に，長女Cさん，二女Sさんはともに昭和初期に，それぞれ病気のために死亡する

大正15年　前記佐々木カツエさんは，佐々木吉五郎氏と結婚する

▼カツエさんは，吉五郎氏との間に，昭和3年に長女，4年に長男永一君を生む

夫吉五郎氏は昭和12年8月，5人の子どもを残して召集され，翌13年に中国大陸山西省で戦死，永一君は小学校3年生で靖国の遺児と呼ばれ，小さい胸に父の遺骨をさげ，十文字駅から二里半の道を歩く。その日から母を助けて農作業に従事し，昭和23年11月，19才で過労のため死亡する。息を引きとる直前にペニシリンが1本打たれる

▼昭和35年4月，母カツエさんも過労のために死亡，苦難の生涯を終る

昭和2年　繭1貫目の値段，3円40銭<米一俵，10円85銭>

昭和7年　地主の持田が一反歩1,200円のものが250円に下落する

U村の地主K氏らが<M村の支配地主>有志で土地会社を創設する

▼米価，昭和5年・6円28銭，昭和6年・6円50銭，昭和7年・8円20銭，

この頃肥料に使われた豆粕が1叺6円であった

また，娘1人の身代金30円であった

昭和8年　秋田県平鹿郡西部で<M村附近>救農土木工事がはじまる

救農土木工事の手間賃は1日60銭，ちょうど地下足袋1足分

仕事は朝晩6時の電気の点滅が合図であった<電気は電燈会社が点滅していた>

▼佐藤熊吉氏，近三治氏，佐々木由松氏らが千葉県の芋掘り，片栗粉工場などに出稼ぎに出る。

昭和9年　繭1貫目が馬鈴薯1貫目の値段<50銭ぐらい>まで下落，村では藁細工がさかんに

なる

ゲバ筵１枚３銭＜上達者でも１日10枚が限度であった＞

昭和10年　佐藤熊吉氏，近三治氏，佐々木由松氏らが横浜の豆炭工場に出稼ぎに出る

佐藤熊吉氏が現地で死亡する

▼豆炭工場は仕事はきつかったが賃金はよく，冬場だけで50円も貯めて帰った＜昭和10年の米一俵10円90銭＞

昭和11年　村の娘たち，Mさん，Yさんらが身売りされる。翌12年には10才の少女Sさんも身売りされる

昭和14年　小作米が反当り一石三斗に上る

昭和16年　前記Sさんの弟＜当時13才＞が大阪に働きに出される

昭和17年　東京方面に闇米運びが盛んになる

▼＜闇米について＞20年頃，村で一俵80円，東京で400円，しかし３ケ月もすると，村の闇米も東京並みになった。もうけの味も３ケ月，猛烈な運搬のため農家の主人が２人，過労のため死亡する

昭和22年～26年頃　＜戦後の身売りと強権発動＞村の娘，Sさん，Yさんの姉妹，それにTさん＜当時いづれも14才～16才＞の方々が身売りされる

▼供出米の強権発動がきびしく続き，梁の上の飯米の差押えや，藁におに竹槍を突いたりして調べた。発動された米俵には「農林技官某」と書いた赤札がつけられ，女達は泣き狂った

昭和29年　中学校卒業生の集団就職がはじまる＜農村部は卒業生の半数以上＞

昭和31年　M村入会泥炭地を開田，１軒あたり約１反歩が割り当てされる。開田時１反歩３万円のものが翌々年には７万円になった＜昭和31年の米一俵3,995円＞

昭和32年　佐藤金市，金司氏兄弟が，東京の土木工事に出稼ぎに出る

昭和34年　若者たちが揃って静岡県清水市のミカン缶詰工場に出稼ぎに出る

昭和39年　十文字町役場内に出稼ぎ相談所が開設され，M農協にも町から委嘱された出かせぎ相談員が置かれる＜農協理事から２名，農家代表１名＞

▼＜農機具・自家用車＞

昭和41年頃，１町歩前後の農家に耕耘機がぼぼゆき渡り，１町歩台の農家に乗用車が入る

昭和45年４月　近忠雄氏＜前記近三治氏の長男で当時49才＞東京都浮間の色素工場で鉛粉障害のため死亡する

同年10月　十文字町役場に出稼ぎ互助会が設置される＜会員数674名＞

▼M農協は，出稼ぎ部落座談会を開き，出稼ぎ賃金送預金事業をはじめる＜出稼ぎ総賃金比で８％を占めた＞

昭和46年３月　柿崎宇衛門氏＜42才＞が千葉県三里塚の空港工事宿舎で死亡する

▼昭和45年度，十文字町M地区出稼ぎ調査＜M農協調査による＞

・農家戸数――495戸

・農業従事者―975人　＜婦人・老人を含む＞

・出稼ぎ者数―274人　＜うち女子５人＞

▼昭和46年度，十文字町M地区出稼ぎ調査＜M農協調査による＞

・出稼ぎ者数―291人　＜うち女子７人＞

・係員「実際はもっともっと行っている」

・出稼ぎ収入＜M地区＞の総額１億５千８百万円と算定される

・M農協の出稼ぎ賃金送預金取扱い高，出稼ぎ賃金総賃金比にして15％に増加する

▼昭和46年度十文字町における出稼ぎ調査

・農家戸数1,750戸

・出稼ぎ者数674人 ＜相談所しらべ＞

・同出稼ぎ者数1,050人 ＜統計係のまとめ＞

・出稼ぎ収入―２億８千万円

・失保受給額１億２千万円

・合計４億円

昭和46年度の十文字町農業収入は14億６千７百７拾２万５千円なので，出稼ぎ収入は，農業収入の総額の約27%を占める

昭和47年４月　藤原慶悦氏＜52才＞が茨城県結城市内の道路工事に就職中，大日本土木の宿舎で死亡する

▼昭和47年度出稼ぎ者数

・十文字町692人 ＜うち女子27人＞

「実際はこの数字の５割増の人数が行っている」という係員の言葉があった

・上記のうちM地区の出稼ぎ者数304人 ＜うち女子20人＞

昭和48年　M地区耕地基盤整備事業がはじまる

▼昭和48年度出稼ぎ者数

・十文字町762人 ＜うち女子27人＞

・上記のうち，M地区の出稼ぎ者数324人 ＜うち女子15人＞

※米価＜60*kg*１俵あたり＞の推移

昭和35年　4,111円 ＜安保，池田内閣発足＞

昭和43年　8,228円 ＜池田内閣の提唱した，所得倍増政策によって倍になったのか？＞

昭和44年　8,278円

昭和45年　8,278円

昭和46年　8,631円

昭和47年　9,032円

昭和48年　10,395円＜実質５年間据え置き＞

昭和49年２月　睦合農協が十文字農協に合併する

同年４月　小西徳太郎氏＜27才＞出稼ぎの過労がたたり，帰宅後まもなく急死する

＜秋田県湯沢北中学校教諭＞